

寿岳文章とウィリアム・ブレイク研究

——日常生活の思想家¹

JUGAKU Bunsho and His Blake Studies:

A Philosopher of Everyday Life

佐藤 光

SATO, Hikari

寿岳文章（1900-1992）は英文学者、書誌学者、和紙の研究者として知られる。寿岳の全体像については、中島俊郎の「ある英文学者の肖像：寿岳文章」²に要を得た紹介があり、寿岳が編纂したブレイク書誌については、磯部直希の「『キルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期」³に詳しい考察がある。本論では、ウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757-1827）の研究者としての寿岳文章に注目し、その特色の一端を明らかにしたい。

1 寿岳文章とブレイクとの出会い

寿岳文章は現在の神戸市西区押部谷町（1982年以前は垂水区）にあたる「播磨の山村の貧しい寺院に、五人きょうだいの末弟として生まれた」⁴。幼名は鈴木規矩王麻呂だった⁵。尋常小学校五年生を終了する十歳の時に、姉夫婦の養子となり、苗字が寿岳に変わり、得度して文章と名乗った。1914年に真言宗立京都中学（現在の洛南高校）に編入学して、寮生活を送る。京都で寿岳はブレイクの作品に出会った。ブレイクとの出会いについて、寿岳は次のように振り返る。

私の追憶は、私の中学生時代へ遡る。播磨の山奥から京都へ出てきた少年の心をいち早く捕へたものは、書店の存在であつた。私の足は殊に屢々烏丸仏光寺を東に入つた所にある東枝と云ふ書店へ赴いた。当時その店は最も敏速に新刊の書物を取り揃へてゐたかと思ふ。大正三年の夏のある日、私の眼はその本屋で薄茶色の紙表紙に包まれた雑誌‘未来’の第二輯に釘づけされた。それは中学二年生が読むには余りに高級な雑誌であつた。だが頁をめくるうちに、私の心は山宮允氏の訳出にかゝる‘ブレイクの詩集より’の幾つかの詩にいたく惹きつけられた。同じく山宮氏の訳されたブレイクの神曲挿画に関するエイツの一文は当年の私にとって余りに難解であつたけれども、奇異なる芸術家ブレイクの存在は、そこに複製された肖像と共に、感じやす

1 本論は2019年2月23日にキャンパスプラザ京都において開催された特定非営利活動法人向日庵講演会「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」の講演内容を加筆修正したものである。中島俊郎理事長と長野裕子事務局長には細やかなお氣遣いをいただいた。また、井上啄智関西学院大学前学長の御厚意により、寿岳文章が関西学院に提出した卒業論文の複写を頂戴した。心より御礼申し上げる。なお、本論は拙著『柳宗悦とウィリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想」』（東京大学出版会、2015）の第一章第三節「寿岳文章と山宮允——日本で編纂されたブレイク書誌」を発展させたものであり、内容の一部が重複する。

2 中島俊郎「ある英文学者の肖像：寿岳文章」、『甲南大学紀要文学篇』162巻（2012年3月）、31-45頁。

3 磯部直希「『キルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期——その装丁における形式と意匠」、『多摩美術大学研究紀要』22号（2008年3月）、123-133頁。

4 寿岳文章「私の英学事始」、『ソニーLL通信』31号（1970年1月）、寿岳文章『寿岳文章書物論集成』（沖積舎、1989）、848頁。

5 寿岳文章「向日庵夜話」、『書物の道』（書物展望社、1934）、寿岳文章『書物の共和国』（春秋社、1981）、131-132頁。

6 寿岳文章「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号(1931年1月)、29-30頁。

7 『国民之友』1巻9号(1887年9月)、42頁。『国民之友』1巻10号(1887年10月)、40頁。

8 東枝吉兵衛が関係した出版物の奥付によると、王陽明選『古本大学』(1882)では「発兌所 京都仏光寺通烏丸東 東枝吉兵衛」、『改正区町村会議全書』(1884)では「編輯兼出版人 東枝吉兵衛」、「発兌元 京都仏光寺通烏丸東 律書房」、京都市参事会編『伯林市行政ノ既往及現在』(1901)では「発行者 東枝吉兵衛 京都市下京区仏光寺通烏丸東上柳町拾番戸」、「発兌元 京都市仏光寺通烏丸東上柳町 東枝律書房」という記載が見える。これは憶測の域を出ないが、いずれも住所が同一であることから、出版元の名義が東枝吉兵衛から律書房、東枝律書房、東枝書店へ変遷したと推定される。

9 『未来』2輯(1914年6月)、55-65頁。掲載されたブレイクの訳詩は「春」、「笑の歌」、「土塊と小石」、「虎」、「神像」、「病める薔薇」、「無心の卜徴」(“Spring”, “Laughing Song”, “The Clod and the Pebble”, “The Tyger”, “The Divine Image”, “The Sick Rose”, “Auguries of Innocence”)である。山宮允訳「ウィリアム・ブレイクとその神曲の挿画」は同誌の125-155頁に掲載。

10 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、30頁。

い少年の心に深くも刻みこまれた。柳宗悦氏の‘キリアム・ブレイク’を手につけて、まづ数数の挿画に魅せられたのも、その本であつたかと思ふ。だがそれは、一ヶ月八円で暮してゐた中学生には余りに高価であつた。(寿岳文章「ブレイク研究への序説」)⁶

「東枝と云ふ書店」とは、東枝吉兵衛(1848-1934)が経営する東枝書店と思われる。京都府女子師範学校附属小学校研究部が刊行した『児童教養手帖』(1910)の奥付には、発行兼印刷者として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝吉兵衛」、発行所として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝書店」という記載が見える。東枝書店は書籍の小売業以外に、出版業を営んでいたようだ。なお、徳富蘇峰が設立した民友社の機関誌『国民之友』(1887-98)の1巻9号と1巻10号の巻末には、『国民之友』を扱う書店の一覧が「国民之友売捌所」として掲載されており、「京都仏光寺通り烏丸東入上柳町 東枝律書店」が含まれる⁷。東枝吉兵衛は王陽明選『古本大学』(1882)、『改正区町村会議全書』(1884)、京都市参事会編『伯林市行政ノ既往及現在』(1901)などの出版を手がけており、東枝書店は京都における情報の配電盤として機能していたのだろう⁸。

この書店で寿岳が出会った雑誌『未来』第二輯には、「ブレイクの詩集より」という表題のもとに、山宮允(1890-1967)が訳出した『無垢の歌と経験の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*, 1794)に由来するブレイクの七編の詩と、「ウィリアム・ブレイクとその神曲の挿画」と題して山宮が訳したW・B・イエイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)のブレイク論が収録された⁹。『未来』第二輯が出たのは1914年6月のことなので、寿岳が記した「大正三年の夏のある日」という記述と辻褄が合う。この年の十二月に柳宗悦の大著『キリアム・ブレイク』が洛陽堂から刊行され、寿岳は東枝書店でこれも手に取ったらしい。同書の定価は三円であつたので、「一ヶ月八円で暮してゐた中学生には余りに高価であつた」と寿岳が回想するのも無理はない。寿岳はブレイクに惹かれた理由について、続けて次のように語る。

自分でも変な象徴詩風の詩を作つて校友会の雑誌などに寄せてゐた私は、ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、「病める薔薇」などを愛誦してゐたのであらうと思ふ。(寿岳「ブレイク研究への序説」)¹⁰

自作の詩を雑誌に投稿していたというところから、旧制中学時代から寿岳が既に文学に強い関心を持っていたことがわかる。おそらく、

それは、寿岳少年がそのような文化的環境で育てられたからであろう。たとえば、寿岳は実家の兄について、次のような思い出を語る。

兄一人、姉三人、私は末子である。のちに東北大学の理学部数学科を出て、第一生命にはいり、第二次世界大戦が終ってからはその副社長をしていた亡兄・鈴木敏一の苦学時代、休暇で帰ってきた二十歳前後の兄は、五歳前後の私を庭へつれ出し、松の古木をぐるぐる廻って鬼ごっこをした。私の手が兄の袖に触れそうになると、兄は“dangerous”と叫んで、つと私から離れる。「おッとあぶない！」という意味の英語を、私に覚えさせる魂胆だったのだろう。私はそれを「デンジャラ・ウス」と受けとり、猿蟹合戦の物語に結びつけ、ウスが頭上に落ちてくるからあぶないのだと連想した。この要領で私は兄から十いくつかの英単語を教えられたが、“dangerous”の記憶だけが少しも薄れないのは、それが私の覚えた英単語第一号だからであろう。

兄から聞き覚えた英語やフレイズを「デンジャラ・ウス」式に片仮名でしるしておいた小さな帳面が、かなり後まで故郷の寺にあった。(寿岳文章「私の英学事始」)¹¹

別の随筆によると、寿岳とその兄との間には十七歳の年の差があったという¹²。幼い寿岳少年にとって、東北帝国大学理学部数学科に通う兄は、文字通りに仰ぎ見るような存在と映ったことだろう。大学生の兄が年の離れた幼い弟の遊び相手をしながら、英語の単語を教えようとする光景は微笑ましい。この微笑ましい光景において、寿岳少年の反応が興味深い。寿岳少年は、馴染みのない dangerous という英単語を理解するために、猿蟹合戦の昔話から、臼が屋根から落ちてくる場面を想像した。「デンジャラ」は落ちてくる臼の擬音語としても解釈できる。寿岳少年は dangerous という英単語の意味として「おッとあぶない」という日本語を暗記するのではなく、自分の頭で考えて、自分の親しんだ言葉に置き直した。ここに見られるのは、与えられた知識を鵜呑みにするのではなく、幼いながらも、主体的に理解しようとする姿勢である。語呂合わせによる古典的な英単語記憶法ではあるが、未知のものを既知のものに引き寄せて、その類似を手掛かりにして理解するという方法は、未知のブレイクを既知の仏教思想で理解しようとした寿岳のブレイク研究の方針と重なる。寿岳は関西学院文学部に提出する卒業論文(図1)で、ブレイクの『エルサレム』を仏教の枠組を手掛かりにしながら読み解き、『エルサレム』に描かれた「その分離と結合とは、かの華嚴經の入法界品に於て善財童子が象徴する靈魂巡礼の記録である」と述べた¹³。寿岳少年の「デンジャラ・ウス」式英単語理解は、寿岳が

11 寿岳文章「私の英学事始」、『寿岳文章書物論集成』、855頁。

12 寿岳文章「わが青春——「藤村」たずさえ旅」、『大阪読売新聞』夕刊(1961年5月8日)、『寿岳文章書物論集成』、848頁。

13 寿岳文章「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」(関西学院文学部卒業論文、未刊行)、50頁。なお、寿岳は回顧録の中で、関西学院に提出した卒業論文の題目を「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華嚴思想の用語」と記している(寿岳文章「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い——向日庵本の思い出をこめて——」、『複製向日庵私版「無染の歌」『無明の歌』(集英社、1990)、寿岳文章訳『ブレイク詩集』(岩波文庫、2013)、287頁)。しかし、寿岳の卒業論文の複写を見る限り、寿岳が関西学院に提出した卒業論文の正式な題目は「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」である。

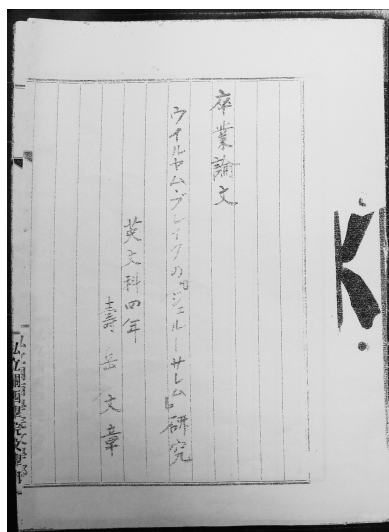


図1 寿岳文章「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」(関西学院卒業論文)表紙の複写。井上啄智関西学院大学前学長の御厚意による。筆者所蔵。筆者撮影。

14 寿岳「私の英学事始」、『寿岳文章書物論集成』、857頁。

ブレイク研究で用いた方法を先取りするものであった、とは言えないだろうか。

寿岳は中学生時代について、次のように振り返る。

宗門の中学だけに、仏典や漢籍の先生はそろっていたが、英語ははなはだしい玉石混淆であった。玉は当時の京都帝国大学文学部に在学するかたわら、学資かせぎに教えにきていた学生たち、石は義兄と同様多少英語がわかる程度の僧侶。玉にめぐりあわなかったら、おそらく私は英語や英文学をめざさず、生物学の方面に志していたかもしれない。生物学には会田竜雄という有名な先生がおり、その先生に私はすっかり心酔していたのである。(寿岳「私の英学事始」)¹⁴

会田竜雄(1872-1957)は「メダカの体色遺伝研究」で学士院賞を受賞した動物学者であり、第五高等学校や京都高等工芸学校(現京都工芸繊維大学)などの教授を歴任した。『アーロン収容所』で知られる会田雄次(1916-97)の父親にあたる。寿岳が「玉」と呼ぶ京都帝国大学の学生から英語を習ったことで、寿岳の英文学に対する関心は深まったようだ。

「英語青年」「中外英字新聞」などの英語研究雑誌の購読者となったのは、中学四年生の中頃からであったと思うが、「英語青年」はさすがに高級で、歯が立たず、主幹佐川春水の「英語の日本」

に最も深くなじみ、親しんだ。(寿岳「私の英学事始」)¹⁵

『英語之日本』は1908年から1917年まで続いた英語学習者向けの雑誌である。英米文学作品の紹介、日本の自然や文化に関する随筆、実用会話の例文などが、詳しい文法事項の解説とともに、英語と日本語の対訳形式で掲載された。斎藤秀三郎(1866-1929)による「君が代」の英訳が載ったこともある。『英語青年』と比べると、『英語之日本』は日本文化を英語で発信することに力点を置いていたらしい¹⁶。

愛読した英語学習雑誌に加えて、中学生時代に大きな影響を受けたのは、文法書であった、と寿岳は言う。

しかし、中学五年生のとき、市河三喜博士の『英文法研究』(大正元年初刊)と、細江逸記博士の『英文法汎論』(大正六年初刊)が私に与えた学問的興奮は格別である。中学卒業記念の修学旅行で、はじめて東京の土を踏んだとき、私が神田の古書店で、財布の底をはたき、Sweetの*New English Grammar*を買い求めたのも、まったくこの両書の影響によるものであった。学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ。(寿岳「私の英学事始」)¹⁷

修学旅行で初めて上京した時に、「財布の底をはたき、Sweetの*New English Grammar*を買い求めた」という記述から、寿岳が英文法というものに強く魅了されたことがわかる¹⁸。ヘンリー・スウィート(Henry Sweet, 1845-1912)は英国の音声学であり、比較言語学者である。音声学、文法、英語の歴史などについて多数の著作を世に送り出したにも関わらず、56歳になるまで大学に職を得ることがなく、人生の大半を在野の研究者として過ごした。ジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)の戯曲『ピグマリオン』(*Pygmalion*, 1912)に登場する言語学者ヘンリー・ヒギンズは、部分的にスウィートをモデルに造形されたという説がある¹⁹。

寿岳と英文法との関係を考える上で重要なことは、英文法から英語という言語の構造を学ぶだけでなく、「学問一般に通ずる科学的な研究方法」を学んだ、と寿岳が述べているところである。寿岳のブレイク研究は、寿岳が振り返るように、「ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、‘病める薔薇’などを愛誦」することから始まったにせよ、やがて、ブレイク研究に関連する書籍や論文の書誌情報を網羅的に収録した『キルヤム・ブレイク書誌』を刊行するに至る。先行研究の蓄積を年代順に整理し、その特徴を把握することは、主観的な感想文を書くのではなく、事実に基づい

15 寿岳「私の英学事始」、『寿岳文章書物論集成』、857頁。

16 斎藤兆史『日本人と英語——もうひとつの英語百年史』(研究社、2007)、25-28頁。

17 寿岳「私の英学事始」、『寿岳文章書物論集成』、857-858頁。

18 Henry Sweet, *A New English Grammar, logical and historical*, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1892-98).

19 ヘンリー・スウィートの伝記的事実については、*Oxford Dictionary of National Biography*を参照。

20 外山滋比古『日本の英語、英文学』（研究社、2017）、51頁。

21 寿岳文章「王堂と八雲」、『東京タイムス』（1945年9月2日、3日、4日）、寿岳文章『英文学の風土』（大修館書店、1961）、190-191頁。「王堂は、明治六年に日本へきて、東京芝西久保広町の青龍寺に住し、橘守部の嗣子冬照の室、東世子その他について、日本古典の研鑽に精進し、翌明治七年、海軍兵学寮の教師となったのを手はじめに、明治四十四年三月、思い出多い日本を永久に去って、ジュネーヴ湖畔に幽棲するまでの四十年ちかくを、東京帝国大学文科大学での、国語学や言語学の教師としての生活を中心に、日本文物の向上発達のために尽瘁したバジル・ホール・チェンバレンのことである。バジルがギリシア語の「王」を意味することと関係があり、ホールが「堂」や「室」を意味するところから、かれは王堂の号を用い、多年の蒐集にかかる約一万一千巻の和漢珍籍に、王堂文庫の名を与え、日本を去るとき、その文庫全部を、愛弟子上田萬年博士に譲りわたしたこと、人の知るところである」（同書、190頁）。

た実証的な研究を行うためには必要不可欠な作業である。寿岳の実証的な研究姿勢と、文法書を通して英語という言語を体系的に学習したこととは、おそらく無関係ではない。

この時代の中学生にとって、英文法が持った意味について、外山滋比古は次のように言う。

かつて、日本の中学生にも英語好きがすくなくなかった。どうして好きになったのかは、はっきりしないが、なんとなくおもしろかったのである。新しいものにふれるよろこびのほかに、文法の知識が知的で、それによって頭が整理されたように感じられたことと関係しているようにも思われる。日本語でそれに対応する知識を与えられなかっただけに余計である。（外山滋比古『日本の英語、英文学』）²⁰

英文法から「学問一般に通ずる科学的な研究方法」を学んだとする寿岳の言葉は、外山の見解を裏書きする。寿岳は文法というものの、実証性と客観性の具体的な形を見たのだろう。寿岳が「科学的な研究方法」に価値を置いたことは、明治期にお雇い外国人として帝国大学で教鞭をとったバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）に、日本語学を築いた功績を認めたところにも見てとれる。寿岳は1945年9月に「王堂と八雲」という随筆を発表して、次のように書いた。

明治十九年の春に、王堂が、文科大学で日本語の先生になったということは、いろいろな意味で興味が深い。それは、一面では時の文部大臣森有礼や、文科大学学長外山正一の進歩思想を反映しているし、また、当時の日本の学術が、日本語さえ外国人から学ばねばならぬほど水準の低いものであったことをも物語っている。国家に対する侮辱だといきまく国学者、またそうした国学者に追隨して、いたずらに憤慨する反動者流もでてきたが、わが国の真に科学的な国語研究の基盤は、王堂によって確立されたというのが真相であり、上田萬年、金沢庄三郎、岡倉由三郎、佐佐木信綱、新村出など、わが国の歌学や国語学や言語学などに新風を拓いた古人今人は、みな王堂の講筵につらなつたか、さもなければ身に近くその学恩を受けた人たちばかりである。（寿岳文章「王堂と八雲」）²¹

王堂とはチェンバレンの号である。発表時期は終戦直後であり、この文面には、日本が新しい社会体制になることを意識した政治的な配慮があったのかもしれない。しかし、それ以上に、「わが国の

真に科学的な国語研究の基盤は、王堂によって確立されたというのが真相であり」という言葉からは、大正から昭和初期にかけて日本が狂信の時代に突入し、科学的な精神と言論の自由とが蹂躪されたことに対して、寿岳が持ち続けたやりきれなさを読みとることができる。

英語の文法書から、英語だけでなく、科学的な思考法を学んだ寿岳は、購読していた英語学習雑誌で関西学院の紹介を見たことがきっかけとなり、関西学院高等学部英文科へ進学する²²。入学したのは1919年4月のことであり、教員の一人に佐藤清(1885-1960)がいた²³。佐藤は仙台出身で、東京帝国大学文科大学英文科で夏目漱石の講義を聴講し、1913年から1923年まで関西学院で教鞭を執った。この間に1917年から2年間にわたって、関西学院から英国留学へ派遣された。第一次世界大戦末期のロンドンで大英図書館に通って英文学を研究する一方で、社会主義者であり、ブレイクの愛好家でもあったエドワード・カーペンター(Edward Carpenter, 1844-1929)と親交を結んだ²⁴。佐藤は1919年3月に帰国して関西学院の教壇に復帰し、その翌月に寿岳が入学する。寿岳が在学した期間に、佐藤はウィリアム・ブレイク、パーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)、ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)について精力的に論文を発表した。寿岳が「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」という卒業論文を提出して、関西学院を卒業するのは1923年の3月である。翌月の4月に佐藤は関西学院を退任し、その後、東京女子高等師範学校教授、京城帝国大学教授、東洋大学英文科教授を歴任した。佐藤が英国留学から帰国して関西学院で教鞭を執り退任するまでの期間と、寿岳の在学期間とを比べると、まるで佐藤は寿岳の卒業論文の指導をするために、関西学院にいたかのようなめぐり合わせである。なお、寿岳が関西学院に提出した卒業論文には、指導教員または審査を担当した教員として佐藤清の署名がある。二年間の英国留学を終えて帰国したばかりの佐藤から、ブレイクを含む英国ロマン派詩人とウィリアム・モリスについて、寿岳は多くの知識を得たものと思われる。

2 ブレイク研究への助走

卒業論文のテーマにブレイクを選んだ寿岳は、『キリアム・ブレイク』の著者である柳宗悦と会う。その経緯について、寿岳は次のように語る。

22 「ちょうどそのころ私が購読していた英語学習誌に、関西学院文科の紹介記事が載っていた。関西学院なら、知人の住職する神戸市背の再度山大竜寺から、助法しながら通えそうだ」(寿岳「わが青春」、寿岳『寿岳文章書物論集成』、849-850頁)。当時、関西学院高等学部は英文学科、哲学科、社会学科から構成されており、1921年に高等学部文科は文学部として独立する。高等学部の設置期間は1912年から1921年までである。詳細については、関西学院百年史編集事業委員会編『関西学院百年史通史編1』(関西学院、1997)、335-342頁を参照。

23 安藤一郎他編『佐藤清年譜』、『佐藤清全集』(詩声社、1964)3巻、323-343頁。

24 佐藤清「エドアルド・カーペンターを訪う」(『六合』1918年)、初出誌未確認、『佐藤清全集』(詩声社、1964)3巻、174-176頁。

25 寿岳文章『『絵本どんきほうて』由来』、『工藝』77号(1937年6月)、寿岳文章『柳宗悦と共に』(集英社、1980)、294頁。

26 「ところで、私はたまたま英文学を志しており、これは柳さんからの直接の影響でなくて、むしろ山宮允氏などからきたんですけれども、ウィリアム・ブレイクを関西学院での卒業論文に取り上げたいと、四年制の学校でしたが、もう二年ころから考えていた」(寿岳文章『柳宗悦を語る』、『展望』211号(1976年7月)、『柳宗悦と共に』、216-217頁)。

あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた私が、関西学院文学部に在学中、英語科中等教員の試験を受けに上京した折を利用して、赤坂高樹町のお宅に柳さんを訪ね、ブレイクの版画複製や書物などを見せて貰ったのは、大正十二年二月二十四日(土曜日)の午後であった。その頃柳さんは面会日をきめていたので、もし面会日でなくて会って貰えなくてはとの懸念から、大学病院に入院中の足助素一氏に紹介状を書いて貰い、中学時代の同窓であり、当時有島武郎氏の家にいた岩瀬法雲と一緒に尋ねたのであった。柳さんは初対面のこの二青年を快く引見してくれた。その日の私の日記は、柳さんを「親しい感じの人」と描き、「宗教の話に時移り、日の暮れかかる頃帰る」とも記している。(寿岳文章『絵本どんきほうて』由来)²⁵

足助素一(1878-1930)は叢文閣の創業者であり、有島武郎(1878-1923)と親交があった。寿岳が言及した『宗教とその真理』と『宗教的奇蹟』は、どちらも叢文閣から刊行されており、足助素一に紹介状を書いてもらうという寿岳の判断は的確だったと言える。寿岳は「あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知り」と書いた。つまり、柳の『キリアム・ブレイク』を読んでブレイクに関心を持ったのではなく、既にブレイクに関心を持っていたところに、柳の『キリアム・ブレイク』と出会い、柳宗悦という名前を心に留めた、ということである。寿岳がブレイクに関心を持つ直接のきっかけとなったのは、柳の著作ではなく、中学生時代に出会った山宮允によるブレイクの訳詩であった。寿岳はブレイクを題材として卒業論文を書くことを、関西学院の二年生の頃に既に考え始めていたらしい²⁶。寿岳が柳に引き寄せられたのは、柳の『キリアム・ブレイク』に出会ったためではあるが、それ以上に柳の宗教哲学の研究に魅了されたからだ、と寿岳は言う。これは、ブレイクに対する寿岳の態度を考えると、重要な意味を持つ。なぜなら、柳が1910年代後半から1920年代にかけて続々と発表した神秘主義思想を中心とする宗教研究の論文は、ブレイク研究の延長線上にあるからだ。たとえば、『宗教とその真理』に柳は次のように書いた。

余は例へば基督教の存在が直ちに仏教の非認であるとは思はぬ。一宗の存在が只他宗の排斥によつて保たれるのは醜い事実であらう。多くの宗教はそれぞれの色調に於て美しさがある。然も彼等は矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであらうか。互は互を助けて世界を単調から複合の

美に彩どるのである。(柳宗悦『宗教とその真理』)²⁷

柳は複数の異なる宗教が存在することをそのまま受け入れる。ある宗教が正しい宗教であって、それ以外の宗教は墮落した宗教である、という排他的な見方を柳はとらない。柳は、むしろ、宗教と宗教との対立を醗いものとみなした。複数の異なる宗教が共存する状態で、それぞれの宗教が持つ世界観に触れて、ものの見方が多面的になることに価値を見出した。「互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩どる」という言葉には、柳が愛読したクロポトキンの『相互扶助論』からの影響が見える²⁸。また、それは、それぞれの土地の文化と伝統に育まれた民藝品に、多種多様な美を見てとった後年の柳の民藝運動につながる。では、なぜ、柳は宗教に多様性を見たのか。

宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない。特殊を無視した一般の宗教は単に架空な構想に過ぎない。或者は豊かな詩情に恵まれてゐる。或者は冥想の力に優れてゐる。或者は知解に秀で、或者は異常な想像に富んでゐる。人々は彼が個性の気質に基いて彼が宗教を持たねばならぬ。(柳宗悦「個人的宗教に就て」)²⁹

一人一人の個人に宿る個性を、柳は神聖なものにとらえる。もし、神が存在するとすれば、個性は神から授けられたものであり、多種多様な個性が地上に存在するということは、万物の創造主としての神の力が広大無辺であることの証となる。したがって、柳によれば、個性の多様性に比例するようにして、神に関する多種多様な理解が生まれ、多くの異なる宗教が存在することになる。

個性を神聖視する柳の宗教哲学は、柳のブレイク研究に遡る。柳はブレイクについて、次のように語った。

個性をにおいて世には何等の宗教がなく哲学がなく芸術がない。人格の偉大とは凡てその特殊の個性にある。彼が若し自己の表現を躊躇したならば彼には何等の製作がない。ブレイク自らの価値は凡て彼の異常な性情にあつた。(柳宗悦『キリアム・ブレイク』)³⁰

柳は宗教と哲学と芸術の源を個性に見る。ここで柳がブレイクを形容するために用いた「異常」という言葉は、それが日常的な文脈では否定的な意味で用いられることが多いとすれば、柳はその否定的な用法を逆手にとった。一般的に「異常」とみなされるような際

27 柳宗悦『宗教とその真理』(叢文閣、1919)、『柳宗悦全集』(筑摩書房、1980-1992)2巻、6頁。

28 「かのクロポトキン公(Prince Kropotkin)は其著「相互補助」“Mutual Aid”の中に動物の移住(Migration)に関する多くの例を挙げてある」(柳宗悦「生命の問題」、『白樺』4巻9号(1913年9月)、『柳宗悦全集』1巻、302頁)。

29 柳宗悦「個人的宗教に就て」、『帝国文学』23巻5号(1917年10月)、『宗教とその真理』、『柳宗悦全集』2巻、183頁。

30 柳宗悦『キリアム・ブレイク』(洛陽堂、1914)、『柳宗悦全集』4巻、328頁。

31 志賀直哉「蝕まれた友情」、『世界』13-16号(1947年1月-4月)、『志賀直哉全集』(岩波書店、1998-2002)7巻、158-159頁。

32 'The worship of God is. Honouring his gifts in other men each according to his genius. and loving the greatest men best, those who envy or calumniate great men hate God, for there is no other God' (Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E43). ブレイクのテキストは *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. by David V. Erdman (New York: Doubleday, 1988) より引用し、Eとともに頁数を記す。

33 'For every thing that lives is Holy' (Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E45).

34 'The Religions of all Nations are derived from each Nations different reception of the Poetic Genius which is every where call'd the Spirit of Prophecy' (Blake, *All Religions are One*, E1).

立った特徴こそが、柳によれば、個性の現れであった。これは個人に特有の性質や能力を遺憾なく発揮することに価値を置く芸術観であり、志賀直哉の言葉を借りれば、「十人十色、勝手に自分の仕たい事をする」³¹という雑誌『白樺』の方針と合致する。柳がブレイクを高く評価することができたのは、個性を規準とする評価軸が既に柳の中に定まっていたからであり、それはブレイクの宗教観と芸術観に柳が共鳴した結果でもあった。ブレイクの『天国と地獄の結婚』に、次のような言葉がある。

神を敬うことは、他人の中にある才能を、その天賦の才能に应じて互いに尊ぶことであり、最も偉大な人を最もよく愛することである。偉大な人を妬んだり中傷したりすることは神を憎むことである。なぜならそれ以外に神はないからである。(ブレイク『天国と地獄の結婚』)³²

ブレイクが用いた「才能」(gifts)と「天賦の才能」(genius)という言葉を「個性」に置き替えれば、そのまま柳の宗教論になる。「人格の偉大とは凡てその特殊的個性にある」という柳の言葉は、ブレイクの神に関する理解を要約したものだと言ってよい。『天国と地獄の結婚』には、「生きとし生けるものはすべて神聖である」³³という言葉も見られる。「生きとし生けるものはすべて神聖」であり、人の活動を通して神が地上に姿を現すのであれば、宗教や哲学や芸術に見られる多様性は、神の意志の反映ということになる。各地に多様な宗教が存在することについて、ブレイクは次のような見解を示す。

すべての民族の宗教は、あらゆるところで預言の精神と呼ばれている詩的精霊を、それぞれの民族が異なる受け取り方をしたことに由来する。(ブレイク『すべての宗教は一つである』)³⁴

ここに表明されたブレイクの宗教観は、「宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない」という柳の言葉と重なる。柳は地球上に存在する様々な宗教の価値を認めて、それぞれの宗教が自立して共存する可能性を探った。この姿勢はブレイクの宗教論と軌を一にしている。宗教と宗教との確執を乗り越える一つの手がかりとして、柳は神秘体験に注目する。

神秘の経験に於て人は宗派を持たぬ、宗派や主張は後に立場によつて加へられた作為である。神秘に於て、一切の宗教は一つ

である。(柳宗悦「宗教哲学に於ける方法論」)³⁵

「一切の宗教は一つである」という柳の言葉も、『すべての宗教は一つである』というブレイクの言葉を想起させる。柳の神秘主義思想研究には、ブレイク以外にウィリアム・ジェイムズ(William James, 1842-1910)からの影響が見えるが³⁶、内容と表現の両方において、柳の宗教研究がブレイク研究の延長線上にあることは明らかである。「ブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた」という寿岳の回想は、ブレイクを思想家として理解するために、最も適切な道筋を寿岳が歩んだことを示している³⁷。

関西学院英文科を卒業した寿岳は1924年に京都帝国大学文学部に入学する。翌年に英文科助教授の石田憲次(1890-1979)の紹介で、河上肇(1879-1946)の長男である政男の家庭教師となり、英語を教えた。後に寿岳は「私の青年時代は、柳、河上、この二人の優れた人物によって形成されていくと言ってもいい」と振り返る³⁸。当時を寿岳は次のように語る。

ついで私は京都大学文学部英文科に進み、ひきつづきブレイクの思想研究をさらに深めていった。すでに私は岩橋静子と結婚し、大学卒業時には二児の父でもあった。経済的には大変であったが、妻とともに私は大いにはたらき、かつ研究にいそしんだ歲月であった。京大での卒業論文の題目は「ウィリアム・ブレイクの神話大系について」である。(寿岳「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」)³⁹

京大英文科について、寿岳はエドワード・クラーク(Edward Clarke, 1874-1934)を「恩師」と呼び⁴⁰、教員の一人であった石田憲次の著書『基督教的文学観』を「腹の底から迸り出た表白として真に尊敬すべき文学批評」と評価した⁴¹。寿岳によると、石田の仕事は「文学的諸現象に関する智識の羅列にしか過ぎぬ文学観や、多くの思ひあがりと歪曲を持つ‘己れを善しとする心’から産み出された主情的な文学観」⁴²の対極に位置する。この評価には、英文学研究に対する寿岳の態度が透けて見えるが、この点については後で触れたい。一方で寿岳は「私見によれば、上田敏が創始し、厨川辰夫が後を継ぎ、ようやく芽を吹きだした京大英文学のheritageが、柳・白二村の早逝以後、消滅した」⁴³という厳しい意見も残している。「柳・白二村」とは上田敏(柳村)と厨川辰夫(白村)を指す。

寿岳が京都大学を卒業したのは1927年であり、ブレイク没後100年に当たる。この年の12月10日から16日まで、柳宗悦、山宮允、

35 柳宗悦「宗教哲学に於ける方法論」、『白樺』11巻4号(1921年4月)、『柳宗悦全集』3巻、347頁。

36 「このように、個人と絶対者との間にある普通の一切の障壁を克服することは、神秘主義の偉大な功績である。神秘的状態において私たちは絶対者の一つになり、同時にまた私たちが一体であることを意識する。これは神秘主義の永遠のすばらしい伝統であって、風土を異にし信条を異にしてもほとんど変わりが無い。ヒンズー教においても、新プラトン主義においても、スーフィ教においても、キリスト教の神秘主義においても、ホイットマン主義においても、同一の調子が繰り返されている。こうして、神秘主義の言説にはいわば永久的な意見の一致があり、これが批評家を立ちどまらせ、考え込ませることになるのである」(ウィリアム・ジェイムズ「宗教的経験の諸相」柗田啓三郎訳(岩波文庫、1969)下巻、244頁)。

37 同じ道筋をたどったのが鶴見俊輔である。鶴見は寿岳との対談で、次のように述べた。「わたしはいま、この寿岳さんの『柳宗悦と共に』(集英社)を二度目に読んでいたんですけど、改めてじっくりしたのは、寿岳さんが柳宗悦に近づいていかれる経路とわたしの経路は、ほとんど同じなんです。『宗教とその真理』(叢文閣 一九一九)からなんですよ。それから『宗教的奇蹟』(叢文閣 一九二一) (鶴見俊輔「柳宗悦の眼」、『ちくま』(1980年11月)、鶴見俊輔『鶴見俊輔座談 日本人とは何だろうか』(晶文社、1996)、193頁)。

38 寿岳「柳宗悦を語る」、『柳宗悦と共に』、233頁。

39 寿岳「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」、『ブレイク詩集』、287頁。

40 寿岳文章「私の戦中戦後史

抄4——最もいそがしかったころ』、『英語青年』129巻11号(1984年2月)、寿岳『寿岳文章書物論集成』、992頁。寿岳によると「昭和九年に逝去するまで、十八年間、京大で英文学を教えたケイムブリッジ大学出身のクラークは、東大や東京文理大にきた英国の詩人たちとはちがい、みずからヴィクトリア女王朝人をもって任ずる博読の随筆的人物であったが、少年時代、横浜で、ハーンに教えられた思い出を、生涯いつくしむほどのひとがらだけあって、教師としては、立派な業績をのこした」(寿岳文章『日本の英文学』、『経済人』14巻9号(1960年9月)、『英文学の風土』(大修館書店、1961)、179-180頁)。

41 寿岳文章「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻9号(1932年9月)、430頁。

42 寿岳文章「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻6号(1932年6月)、287頁。

43 寿岳「私の戦中戦後史抄4」、寿岳『寿岳文章書物論集成』、991頁。

44 寿岳文章「ブレイクと華岳」、『あるびよん』47号(1959年12月)、寿岳文章『英文学の風土』、216頁。

45 寿岳文章「宗悦・柳さんのおもかげ」、『春秋』134号(1972年6月)、『柳宗悦と共に』、251-252頁。

46 「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品データ」による。資料番号は130180001000。長崎太郎の詳細については、関口安義『評伝長崎太郎』(日本エディタースクール出版部、2010)を参照。

寿岳文章の企画により、京都博物館で「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」が開催された。寿岳によると、この展覧会にほとんど毎日のように朝早くからやってきて、ブレイクの絵をじっくり鑑賞していたのが村上華岳(1888-1939)であったという⁴⁴。また、寿岳はこの展覧会に関して、柳にまつわる興味深い逸話を書き留めている。

ブレイク百年忌記念展のとき、この催しを耳にした京都大学の長崎太郎氏が、ブレイク版画の複製でなくオリジナルを一枚もっているから、貸してもよいとの申し出があった。しかし柳さんは、そんなはずはない、複製だろうと断ってとりあげない。これをもれ聞いた長崎氏は憤慨し、実物か複製かたしかめもしないで、複製だろうときめてかかるような人間には、貸せと言っても貸してやらぬと、かたくなになってしまった。長崎氏、今は故人であるが、京都市立美術大学の学長をつとめていたその晩年、私との間に文通があり、当時のいざこざを水に流してもらったが、柳さんの強烈な自信ゆえに生じたこの種の感情のもつれは、私の知るだけでもずいぶん多いようである。(寿岳文章「宗悦・柳さんのおもかげ」)⁴⁵

長崎太郎(1892-1969)は京都帝国大学法科大学を卒業後、日本郵船に入社し、駐在員としてアメリカに長く滞在した。この間に長崎はブレイク関係の資料を熱心に収集した。帰国後、武蔵高校教員、京都帝国大学学生主事、山口高校校長を経て、京都市立美術専門学校校長として新制大学昇格作業を行い、京都市立美術大学学長を務めた。これらのブレイク関連資料の一部は、その後、京都市立芸術大学の所蔵品となり、その中には1797年に制作されたブレイクの銅版画『夜想』(*Nights Thoughts*, 1797)が含まれる⁴⁶。柳と長崎太郎をめぐる寿岳の思い出話からは、柳の人物がしのばれるだけでなく、柳のブレイク研究と宗教研究から大きな影響を受けながらも、寿岳が公正な眼で柳を見ていたことが伝わってくる。

関東大震災が発生した翌年の1924年に、柳は京都市上京区吉田下大路町へ移り、さらにその翌年の1925年に吉田神楽岡へ転居した。寿岳は柳との交流の始まりについて、次のように振り返る。

翌年、柳さんは吉田山の東麓の神楽岡へ転宅したが、柳さんと私との交遊が密となるのは、昭和二年の十二月中旬に、京都博物館で、ウィリアム・ブレイク百年忌記念展を開くときだったその年の、春すぎてからである。そのころ、私は南禅寺山内の偈壺庵に住んでいた。吉田山東麓と南禅寺との距離は、徒歩三十分たらず。黒谷を抜けて岡崎へ出ても、鹿ヶ谷から疎水に

沿い、いわゆる哲学者の道を取っても、当時は快適な散策のコースであった。記念展の出品物うちあわせのため、よく往き来した。しかし三つの学校で教え、時間的制約の多かった私が神楽岡へ赴くよりも、柳さんが南禅寺へ来る場合が、はるかに多かったように思う。[中略] 僊壺庵というのは、南針軒河野霧海老子のくつろぎ処で、三つの建物から成り、その一番奥のが、私たちの寓居であった。門脇のくぐり戸から、優に三十メートルは隔たっていたであろう。柳さんは、いつでも、くぐり戸をあけるなり、「ジュガクーン！」と、よく響く声をはりあげながら、梅の木の植込みや、かなめの生垣に囲まれた通路を進入してくる。(寿岳文章「柳さんとの日々」)⁴⁷

柳と寿岳の楽しそうな様子が伝わってくる。寿岳の回想によると、ブレイク没後百年記念の展覧会を開催した1927年に、次の大きな仕事となる『キルヤム・ブレイク書誌』の編纂を始めたという⁴⁸。京都帝国大学教授であり、言語学者であり、後に『広辞苑』の編者として知られることになる新村出(1876-1967)が、神戸で「ぐろりあそさえて」という出版社を設立した伊藤長蔵(1887-1950)に寿岳を紹介し、ブレイク書誌の刊行事業が始まった。『キルヤム・ブレイク書誌』の序文に、寿岳は次のように記した。

さうして、着手以来十三ヶ月の日子を闊した今日、漸く本文全部の脱稿を見たのである。もとより私の‘ブレイク書誌’は、その完成に十八年の歳月を要したKeynes博士が不朽の名著に比ぶべくもないが、またその名著なくば私の書誌は実現し得なかつたのであるが、収載文献の数に於いて、私の書誌が、Keynes博士のそれに比し、倍を遥かに越えてゐる事實は、博士の書誌はあれど、なほこの書が決して無意義な存在ではないことを明かにしてくれるであらう。(寿岳文章『キルヤム・ブレイク書誌』)⁴⁹

寿岳が触れた「Keynes博士が不朽の名著」とは、ジェフリー・ケインズ(Geoffrey Keynes, 1887-1982)が1921年に出版した*A Bibliography of William Blake*である⁵⁰。経済学者ジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes, 1883-1946)の弟にあたるジェフリー・ケインズは、ケンブリッジ大学で医学を学んでいたとき、ブレイクが旧約聖書『ヨブ記』の挿画として制作した銅版画の連作に出会って、ブレイクの虜となった。ケインズはブレイクの詩集、絵画、銅版画、ブレイクに関して書かれた伝記、研究書、論文、随筆などを出版年代順に整理して、それらの書誌情報を目録にまとめ

47 寿岳文章「柳さんとの日々——昭和ひとけた時代における——」、『柳宗悦集私版本(丹波の古陶)』第5巻月報(春秋社、1974年11月)、『柳宗悦と共に』、253-254頁。

48 寿岳文章「自装本回顧」、『書物展望』5巻4号(1935年4月)、『寿岳文章書物論集成』、489頁。

49 寿岳文章『キルヤム・ブレイク書誌』(ぐろりあそさえて、1929)、vii-viii頁。

50 Geoffrey Keynes, *A Bibliography of William Blake* (New York: The Grolier Club of New York, 1921).

51 寿岳文章『書誌学とは何か』（ぐろりあそさえて、1930）、寿岳『書物の共和国』、243頁。

52 寿岳文章「書誌学とその職分」、『書物展望』4巻1号（1934年1月）、『寿岳文章書物論集成』、691-692頁。

た。この作業は1908年に始まり、13年後の1921年に書籍として刊行される。完成までに13年を要したのは、書誌編纂作業そのものが時間と労苦を必要としたことに加えて、1914年に始まった第一次世界大戦にケインズが軍医として従軍したためであった。

書誌学とは何だろうか。寿岳の定義を引用する。

最も簡明に記述するならば、それは「書物に関する科学」(the science of books)である。(寿岳文章『書誌学とは何か』)⁵¹

関西学院と京都帝国大学の卒業論文で既にブレイクを論じてはいたが、寿岳の本格的なブレイク研究は、ブレイクに関する書誌を編纂することで始まった。それは、ブレイクについて出版された「書物に関する科学」という形をとった。寿岳によると、書誌学とは、蒐集、列挙、記述、分析、結論の五つの段階から構成される⁵²。まず、必要な文献を集める。集めただけでは乱雑な状態のままなので、集めた文献を整理して列挙しなければならない。次に、それぞれの文献の出版地、出版社、出版年、頁数などの書誌情報を記述する。これは文献の書誌情報を可視化する作業である。その後、書誌情報に誤りがないかどうかを確認する。出版年が脱落したり、誤った情報が記載されている文献については、関連資料から出版年を復元し、必要に応じて、訂正する。これが分析という段階である。最後に、これらの書誌情報を年代順に並べたとき、新たな事実が見えてくる。この発見こそが、書誌を編纂した結果として明らかになる結論である。

書誌学とは書物に関して事実を確定する作業である。ブレイク研究という領域に限定した場合、ブレイクに関する書誌の作成とは、ブレイクに関して、いつ、どこで、どのような研究書が刊行され、どのような論文が発表されたか、というブレイク研究史を確定することを意味する。先行研究の動向を把握して、既に何が明らかにされたのか、まだ何が明らかにされていないのか、を知らなければ、新しい研究はありえない。研究とは、常に、従来の研究に対する修正及び追加というかたちをとる。新説として出した自説が、五十年前に出された説と瓜二つだったと判明した場合、もし、それが剽窃であったならば、研究者失格であることは言うまでもない。たとえ、もし、それが先行研究を見落としたことによる偶然の一致だったとしても、そのような重要な先行研究を見落としたということは、研究者として誇りにできることではない。研究という営みは、常に先行研究の蓄積の上に成り立つ。寿岳はケインズが編纂したブレイク書誌について、次のように言う。

Keynes博士が本書の編纂に着手したのは、1908年の12月、博士がまだCambridgeのundergraduateであつた頃で、世界大戦争が刊行の時期を幾らかおくらせたとは言へ、出版までに実に十三年の長年月を要してゐる；もつて本書の規模と価値とがいかに大きいものであるかを想像し得るであらう。言ふまでもなく、書誌は文献の文献であり、当該研究の根柢をなす基礎工事である。本書はその意味に於いて、一切のブレイク文献のうち最も貴重なる文献と言ふを得べく、過去のあらゆるブレイクの文献を蔵するのみならず、未来のブレイク研究者に最も信頼すべき出発点を与へる。(寿岳『キルヤム・ブレイク書誌』)⁵³

寿岳は書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」、「最も貴重なる文献」、「最も信頼すべき出発点」と位置付けた。研究史という事実の蓄積を重視する姿勢は、科学的研究姿勢と言い換えることができる。この研究姿勢の源は、英文法から知的刺激を受けた中学生時代に遡ることができるかもしれない。既に見たように、寿岳は「学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ」という言葉を残している。あるいは、柳のブレイク研究の影響も想定できる。柳は『キリアム・ブレイク』の巻末に「主要参考書」という項目を設け、当時入手可能であつたブレイク関連の文献を「複製本」、「活版本」、「書翰集」、「伝記」、「評論」、「雑誌」、「目録」、「複製」という見出しのもとに分類して一覧表にし、それぞれの内容の概略を紹介した。先行研究に敬意を払い、書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」とみなす姿勢は、柳と寿岳に共通する。自分自身の独創性を強調するために、参照した二次資料を隠そうとする態度は、この二人には見られない。ある二次資料を手掛かりに様々な一次資料の存在を知り、その二次資料とは異なる結論を導いた場合でも、当該二次資料は有力な先行研究として明記されるべきである。そのような研究倫理の基盤として書誌が存在する。書誌を重視する二人の姿勢は、雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン研究入門」として柳が連載した「第一篇 ホキットマン書誌略解」と⁵⁴、柳の依頼を受けて寿岳が後に作成した*A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan: From 1878 to 1935* (The Sunward Press, 1947) にも見ることができる。

寿岳が編纂した『キルヤム・ブレイク書誌』には、内容と形態のそれぞれにおいて特筆すべき意義が認められる。ケインズのブレイク書誌に登録された情報の中に、寿岳は日本で刊行されたブレイク関連の文献情報を埋め込んだ。英語やフランス語で書かれた文献と日本語で出版された文献とを区別することなく、寿岳はすべてを年代順に並べた。結果として、ブレイク研究史全体を見渡したとき、

53 寿岳『キルヤム・ブレイク書誌』、383-384頁。なお、寿岳は1970年にブレイク研究の書誌学者Gerald E. Bentley Jr (1930-2017)の訪問を受け、「京都四条鴨川ぞいの一料亭」で会談をした。「ブレイク研究の中心世代は、いわば私の息子にあたる人たちのそれに移ったかと、当世風にあごひげなどはやしているベントリー・ジュニアの顔を、つくづくと眺めながら、私は感慨にふけた」という感想が残っている(寿岳文章「ブレイクと日本」、「学鑑」、1973年3月、寿岳文章『わが日わが歩み——文学を中軸として』(荒竹出版、1977)、83頁)。Bentleyが他界した後、ブレイク研究の書誌作成作業は複数の研究者による分業体制に移行した。経緯については、Wayne C. Ripley with Works in Romance Languages Collected and Compiled by Fernando Castanedo and Works in Japanese Collected and Compiled by Hikari Sato, 'William Blake and His Circle: A Checklist of Scholarship in 2017' (*Blake/ An Illustrated Quarterly*, 52. 1 (2018) <<https://blakequarterly.org/index.php/blake/article/view/ripley521/ripley521html>>に付されたIntroductory Essayを参照。

54 『ブレイクとホキットマン』1巻2-5号、7-12号、2巻1-2号、4-12号。

55 寿岳「自装本回顧」、『寿岳文章書物論集成』、490頁。

56 寿岳文章「総合芸術としての書物——拙著『キルヤム・ブレイク書誌』について」、『宗教と芸術』10巻3号、4号(1929年9月)、『寿岳文章書物論集成』、866-867頁。

57 「当時、柳は、美しさを産み出す母型とも言うべきものが存在すると考え、それを組みあわせてゆけば、いくらでも美しい模様ができるとの理論を立て、しばしば私にも、目の前で描いて見せ、説明した。この蔵書票や昭和四年刊の自著『工芸の道』および私の『ブレイク書誌』の扉のデザインは、すべてその理論の実践である」(寿岳文章『図説本の歴史』(日本エディタースクール、1982)、182頁)。

58 磯部「『キルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期」、『多摩美術大学研究紀要』22号、130頁。

日本語で刊行されたブレイク関連の文献の歴史的な位置付けが一目でわかるようになった。

もう一つの特徴は、『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀である。寿岳は同書の装幀について、次のように回想する。

表紙の材料としては、特装本は青田君の織った紬、並装本は皮と紺紙の四半装幀ということに伊藤氏と私との意見が一致して、題箋、扉などの意匠は柳さんに一任することになった。(寿岳「自装本回顧」)⁵⁵

私の書誌は、本文も挿画も全部鳥の子を用い、印刷にはヨーロッパ中世の揺籃期活字本に則ってrubrication(朱刷)を施し、装幀も柳宗悦氏の指揮に従ったため、少くともヨーロッパ文芸に関して日本で出版された他のいかなる書物よりもすぐれた芸術的な効果を持ちえた。(寿岳文章「総合芸術としての書物」)⁵⁶

青田とは染織家の青田五良(1898-1935)であり、工藝家の黒田辰秋(1904-82)とともに、柳の提案を受けて、1927年に上賀茂民藝協団の一員として活動した。これらの寿岳の証言から、紙とインクと活字と表紙とその他の装幀について、寿岳と柳と伊藤が知恵を出し合って、書物としての最終的な形態が決定されたことがわかる⁵⁷。その結果「青田君の織った紬」を用いた特装本は1冊70円、「皮と紺紙の四半装幀」の並装本でも1冊60円という高価な書物となり、発行部数は200部の限定版であったため、ブレイク研究史を世に広める、という本来の目的を達成することができたか、という点については疑問が残る⁵⁸。しかし、寿岳と柳にとっては、内容だけでなく、外的な形態にも心血を注いで書物を作ったという意味では、その後の向日庵私版本や雑誌『工藝』の制作につながる先駆的な企画であった、と言えるだろう。

3 雑誌『ブレイクとホイットマン』

1929年5月に柳は濱田庄司とともにシベリア鉄道でヨーロッパへ向かう。旧知のラングドン・ウォーナー(Langdon Warner, 1881-1955)にハーヴァード大学での講義を委嘱されたためである。英国到着後、濱田はバーナード・リーチ(Bernard Leach, 1887-1979)の工房にとどまったので、柳は大西洋を一人で渡ってアメリカに向かった。伊藤長蔵から資金援助を受けた柳は、講義を行うかたわらで、アメリカの詩人であるウォルト・ホイットマン(Walt Whitman,

1819-1892)に関する文献を収集した。この時に集めた資料をもとにして、柳は雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン書誌略解」を連載することになる。

雑誌『ブレイクとホキットマン』誕生の経緯について、寿岳は次のように語る。

今からふりかえってみると、一九二七年の十二月、恩賜京都博物館で、百年忌記念のブレイク展を開催したのを契機に、ブレイク・ホキットマン両詩人を結ぶ研究誌を出そうじゃないかとの発想は、柳と私の二人にあった。そして、ブレイクに関しては私が、ホキットマンに関しては柳が、内容の責任をもつことにきまっていた。(寿岳文章「解説 柳宗悦と英米文学とのかわり」)⁵⁹

雑誌『ブレイクとホキットマン』は1931年1月に創刊され、1932年12月まで続き、全24冊が刊行された。『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀に寿岳と柳に向けた情熱は冷めておらず、『ブレイクとホキットマン』の装幀も考えに考えぬかれたものとなった。寿岳は1巻1号の「雑記」で次のように説明した。

私の考案を中井商店の濱阪誠一君に伝へて越前へ注文した紙は、見らるゝ如く実に立派なものである。無論外国にも十分に誇り得られる。漉標の鍵は柳さんの考案で、‘真理を開く’ことの象徴。それにブレイクとホキットマンの頭文字を配した。なぜこんな贅沢な紙を使ふかと怪しむ人には、キリヤム・モリスが‘ケルムスコット・プレス設立の主旨’中に述べてゐることがよき答へとなるだらう。これもいづれ悉く書きたい。表紙と題扉の意匠も柳さんのもの、木版彫刻は黒田辰秋氏を煩はした。刷りあがつたら、私達夫婦が一々丁数を調べて糸で綴ぢる。(寿岳文章「雑記」)⁶⁰

特別に発注された越前産の鳥の子紙には、BとWのアルファベットと鍵の図案とが透かし模様として入った。この鍵の図案は、1931年に刊行された『ブレイクとホキットマン』第1巻全12冊の表紙にもあしらわれた。1932年の第2巻の表紙には扉が配されたので、寿岳の言葉を借りるならば、「真理を開く」鍵と開かれる扉が1巻と2巻の表紙を飾ったということになる(図2、図3)。扉の図案は、ブレイクが『エルサレム』(*Jerusalem*, 1820)の口絵として制作した図版に類似しており、柳が表紙の意匠を手掛けたこととあわせて考えるならば、ブレイク研究者としての柳が、ブレイクの図版を手掛かり

59 寿岳文章「解説 柳宗悦と英米文学とのかわり」、『柳宗悦全集』(筑摩書房、1980-1992)5巻、628頁。

60 寿岳文章「雑記」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、47頁。

にして、扉の図案を用意した可能性が想定できる(図4)。寿岳は装幀一般について、ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレスに言及した。詩人であり、工藝家であり、社会主義者であったモリスは、理想的な書物を出版するために、1891年に印刷工房を設立しケルムスコット・プレスと名付けた。モリスは「理想の書物」とい



図2 『ブレイクとホキットマン』1巻1号表紙。筆者所蔵、筆者撮影。

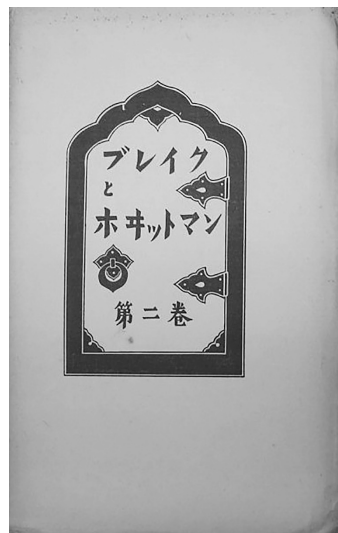


図3 『ブレイクとホキットマン』2巻1号表紙。筆者所蔵、筆者撮影。



図4 William Blake, *Jerusalem*, Frontispiece, Copy E, 1804 to 1820, Yale Center for British Art, Paul Mellon Collection.

う随筆の中で、美しく読みやすい書物を作るために、文字の色、配置、余白について指針を示した。余白に関するモリスの言葉を引用する。

すなわちその法則とは、ページの内側(綴じ目の方)の余白は最小にとり、天の余白はこれより広く、外側はさらに広く、そして地の余白を最大にとらねばならぬというものである。(ウィリアム・モリス「理想の書物」)⁶¹

基本的に画数の少ないアルファベットと、画数の多い漢字や縦につながる形態上の特徴を持つ平仮名とでは、文字としての性質が異なっており、欧文活字の組み方をそのまま漢字仮名交じり文に当てはめることはできない。しかし、雑誌『ブレイクとホキットマン』の余白に関する限り、概ねモリスの指針に従ってページレイアウトが組まれた、と言えるだろう(図5)。このようにして、寿岳と柳が工夫を凝らした紙面が刷り上がると、寿岳夫妻が手仕事で製本作業を行った。寿岳は当時を次のように回想する。

これは私の主張もあって、簡単な、真ん中を三ところ絹糸で綴じるというのではありますけれども、五百部を全部手製本するというのは大変なことで、初めのうちは柳夫婦が南禅寺の北門にあった私の住居へやってきて、そして四人が、ぶすぶすぶすぶす針で穴をあけては絹糸で綴じかがるという仕事をして

61 ウィリアム・モリス「理想の書物」、ウィリアム・S・ピータースン編『理想の書物』川端康雄訳(晶文社、1992)、152頁。

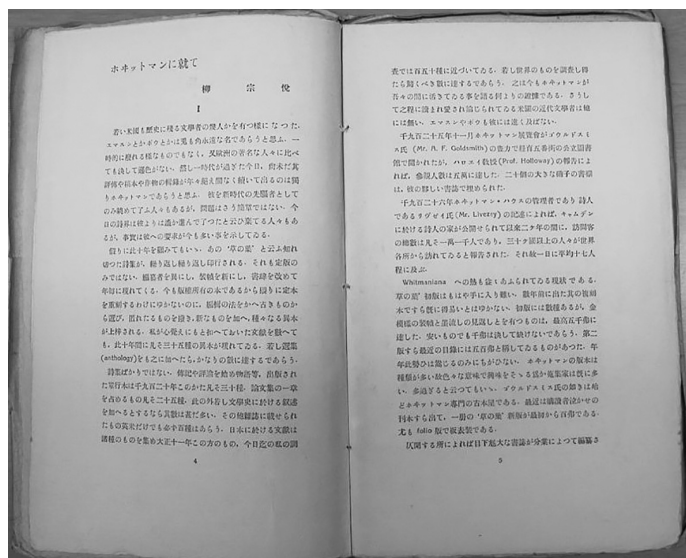


図5 『ブレイクとホキットマン』1巻1号(1931年1月)、4-5頁。筆者所蔵、筆者撮影。

62 寿岳「柳宗悦を語る」、『柳宗悦と共に』、224頁。

63 寿岳「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」、『ブレイク詩集』、293頁。

64 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』1巻2号(1931年2月)、94頁。

65 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、37頁。

おったんですね。ところが、これは大変だといちばん最初に音をあげたのは柳さんで、兼子夫人は、私は器用で針仕事もうまいもんだから、と言って頑強にやり通したのには感心しました。(寿岳「柳宗悦を語る」)⁶²

製本は、私たち夫婦が手綴じした。時には兼子夫人を伴って柳宗悦も応援にやってくる夜があった。そういう時、妻はよくビフテキを焼いていた。娘は今も語る。「あの頃は、そういう方面には柳さんの民芸の影響はまだ受けてなかったんで、そのビフテキをのせたお皿も、白地に水色の線のはいったつまらん西洋皿だった」。(寿岳「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」)⁶³

手仕事が苦手な民藝の提唱者、裁縫と同じだと言って淡々と作業を進める柳兼子、「つまらん西洋皿」を見落とさない寿岳章子、彼らの様子を記録する寿岳文章の姿が、それぞれの人となりを端的に表していて興味深い。『ブレイクとホキットマン』の当初の発行部数は500部である。寿岳は1巻2号の編集後記に、創刊号が刷り上がったのが1月14日の夕方であり、柳夫妻の応援を得て、すべての製本作業を終えたのは16日の午後だった、と書いている⁶⁴。

装幀と製本に情熱を注いだ寿岳は、当然のように、内容の充実にも情熱を注いだ。『ブレイクとホキットマン』1巻1号で、寿岳はブレイク研究の骨子を説明した。

本誌に於いて私が企ててゐるブレイク研究は、次の四部に分れる：

- A. 翻訳
- B. 伝記
- C. 評論
- D. 書誌

誰もがブレイクを日本語で読めるやうにしたいとは、私の久しい間の念願である。それゆえ私は主力を翻訳に傾けたい。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁶⁵

寿岳が示した四部構成には、科学的にブレイクに取り組もうとする書誌学者としての寿岳の姿が見える。「主力を翻訳に傾けたい」と述べた寿岳は、翻訳の方針について、次のように述べる。

私はブレイクが我々に書き残した一切の文字を、私の解釈に従って、出来るだけ忠実に、美しい所は美しく、醜い所は醜く、

しかし語句よりは思想の伝達を主として、原文の年代順に訳出してゆきたいと思ふ。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁶⁶

「原文の年代順に訳出してゆきたい」という寿岳の意志表明は、書誌学者として譲れないところだったのかもしれない。しかし、結果として、ブレイクの特徴がそれほど顕著でもなく、またブレイクの言葉として興味深いものがそれほど多く含まれているわけでもない作品が、優先的に訳出されることになった。これが、この雑誌を展開する上で、凶の結果をもたらした可能性を考えざるを得ない。寿岳は翌年の『ブレイクとホキットマン』2巻2号に、「過去一年間に約六十名の読者を減じた」⁶⁷と書いた。最終号となる2巻12号の編集後記には、「たうとう五百の数が半分にまでなつてしまひました」⁶⁸という寿岳しづの言葉が見える。読者の減少と掲載内容の選択との間に因果関係がない、と言い切れるだろうか。年代順という原則のもとで寿岳が訳出した『ブレイク小品詩集』(*Poetical Sketches*, 1783)と「ブレイク初期の散文」と『月の中の島』(*An Island in the Moon*, 1784)に、読者をつなぎ留めるだけの魅力があった、とは考えにくい⁶⁹。ブレイクの作品群全体を視野に入れてブレイクを研究しようとするとき、これらは研究に値する作品ではあっても、『無垢の歌と経験の歌』や『天国と地獄の結婚』に比べれば、いずれもおもしろさに欠ける。雑誌『ブレイクとホキットマン』を購読してみようと思ひ立つ読者は、寿岳の眼を通して描かれたブレイクの伝記や評論を待ち望んでいたのではないだろうか。寿岳によるブレイク伝の連載が始まったのは2巻8号であり、翌々月の2巻10号には、経営困難のために休刊する、という通知が掲載された⁷⁰。この間に、1931年9月に寿岳しづと子息潤が腸チフスのために入院し、看病をした寿岳文章も10月に入院して12月まで退院することができなかった。このような予測できない緊急事態があったにせよ、もっと早い時期からブレイクの伝記を掲載して、年代順にとらわれずに、ブレイクの代表作とされる『無垢の歌と経験の歌』や、柳が夢中になった『天国と地獄の結婚』を訳出するという判断をしていれば、雑誌『ブレイクとホキットマン』はもう少し長く続いたのかもしれない。

伝記の方針について、寿岳は次のように定めた。

Bの伝記に於いて私の企ててゐるのは、能ふかぎり正確な客観的記述である。こゝでは人間としてのブレイクが、その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて、ありの儘に描き出されるであらう。私はそれを、謂はゞ一個の飾りなき裸像であらしめたい。我々はそれに、我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべきだと私は考へる。(寿岳「ブ

66 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、37頁。

67 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻2号(1932年2月)、95頁。

68 寿岳しづ「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻12号(1932年12月)、568頁。

69 『ブレイク小品詩集』は1巻1号-7号、「ブレイク初期の散文」(Lavatorの *Aphorisms on Man* に対する傍注)は1巻8号、『月の中の島』は1巻9号、2巻2号、4号、5号に掲載された。

70 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻10号(1932年10月)、478頁。

71 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、37-38頁。

72 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、38頁。

レイク研究への序説)⁷¹

「正確な客観的記述」、「その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて」、「ありの儘」、「飾りなき裸像」という表現から、偉人としてブレイクを讃美するのではなく、この世に生きた生身の人間としてブレイクを描くという寿岳の意図が見える。さらに、「我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべき」という言葉には、事実の記録としてのブレイク像が確立された後、そのブレイク像をどのように解釈するかという主体性は、一人一人の読者にある、という考え方が滲み出ている。明治の文明開化と欧化政策のもとでは、欧米の文学を模範として、その模倣に励むことが推奨された。これに対し、寿岳は一人一人の日本人読者が、それぞれの価値観に基づいてブレイクを吟味し、理解することを促した。

同じような姿勢は、寿岳が打ち出した評論の方針にも見ることができる。

私は能ふかぎり心を虚しうして先づブレイクの声に聞き、しかる後私に与へられる最善の愛と理解とを語らう。また許されるならば、ブレイクと闘ふことをすら敢てしよう。かくして現れるブレイクは、私の思想と生活との中に血肉となつて生きるブレイクである。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁷²

「心を虚しうして先づブレイクの声に聞き」の部分は、読者の偏見と先入観でブレイクを歪曲することなく、ブレイクを客観的に理解することを意味する。そして、そのようにして理解した後は、読者自身の価値観で「ブレイクと闘ふこと」を辞さない。所謂先進国であり、列強諸国の中でも大国とされた英国の詩人であるからといって、ブレイクの言葉を鵜呑みにするのではなく、ブレイクの言葉と対等に対話することを通じて、「思想と生活との中に血肉となつて生きる」ようなブレイク理解を寿岳は目指した。

寿岳がここで用いた「血肉となつて」という表現は、『ブレイクとホキットマン』1巻1号の編集後記に柳が記した言葉と呼応する。柳は言う。

発刊の趣意書でも書いておいたが、私の考へでは外国の文学を取り扱ふ場合、研究が只西洋人の書いたものに精通する丈ではどうもつまらない。又さう云ふやり方では二義的な事より出来ず、又何も新しい事を加へる事が出来ない。私達が外国文学を取り扱ふ場合はやはり東洋的に見るとか、東洋人としての吾々に肉となり血となるものを書くとか、さう云ふ点迄入らないと、

何も文学が身につかないと思ふ。学者の通弊は只知るに止つて
体得しない点にある。(柳宗悦「雑記」)⁷³

73 柳宗悦「雑記」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、『柳宗悦全集』5巻、21頁。

外国文学との接し方について、「西洋人の書いたものに精通する
丈」で「知るに止つて体得しない」あり方を、柳は「学者の通弊」と
呼んだ。そして、これと対置する形で「東洋的に見るとか、東洋人
としての吾々に肉となり血となる」あり方を、目指すべき方向とし
て示した。外国文学が「吾々に肉となり血となる」とは、外国文学
に接することで得られた知見が、社会生活に応用され、活用される
ことと言い換えることができる。外国文学に対するこのような接し
方の源流は、夏目漱石に遡ることができる。漱石は、英文学徒で
あった若い頃を振り返って、次のように言う。

74 夏目漱石「私の個人主義」、
夏目金之助『漱石全集』(岩波書
店、1993-2004) 16巻、593-594
頁。

近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や
角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです。まして其頃は
西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲従して威張つたもの
です。だから無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男
が比々皆是なりと云ひたい位ごろごろ[原文踊り字]してゐま
した。他の悪口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつた
のです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評し
たのを讀んだとすると、其評の当否は丸で考へずに、自分の腑
に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評に触れ散らかすのです。
つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、
到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、余所々々しいもの
を我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又
みんながそれを賞めるのです。

けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威
張つてゐるのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽を身
に着けて威張つてゐるやうなものですから。(夏目漱石「私の
個人主義」)⁷⁴

漱石は、西洋由来の知識を充分に理解しないままに、他人の知
らない知識を持っていることを自慢する様子を、「無暗に片仮名を
並べて人に吹聴して得意がつた男」と揶揄し、かつての自分自身の
姿である、と述べる。「丸で考へずに」、「腑に落ちやうが落ちまい
が」、「鵜呑」、「機械的の知識」という一連の表現から、主体性もな
ければ、批評精神もなく、知識をひけらかすだけの自己中心的な人
物像が浮かび上がってくる。はったりとこけおどしの道具として知
識を振り回す輩と、そのような輩であった過去の自分自身とを、漱
石は「孔雀の羽を身に着けて威張つてゐるやうなもの」と一刀両断

75 夏目「私の個人主義」、『漱石全集』16巻、594頁。

76 柳宗悦「日本の眼」、『心』10巻12号(1957年12月)、『柳宗悦全集』17巻、429頁。

77 桑原武夫「研究者と実践者」、『思想の科学』(第4次1号、1959年1月)、桑原武夫『桑原武夫集』(岩波書店、1980-88)6巻、9-10頁。

にする。そして、漱石が到達した外国文学との接し方について、次のように言う。

たとへば西洋人が是は立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の参考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具へてゐなければならぬ以上に、世界に共通な正直といふ徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。(夏目「私の個人主義」)⁷⁵

一人の読者として英文学の作品に接して、一つの意見を持ったとき、英国の批評家が何を言おうと「私は私の意見を曲げてはならない」、と漱石は言う。このような姿勢を漱石は「自己本位」と呼んだ。近代日本が明治の欧化政策で始まったことを考えれば、欧米の文学を前にして「自己本位」の姿勢を保つことは容易ではないのかもしれない。柳は1957年に「日本の眼」という随筆で「外国に学ぶのはよいが、それが崇拜となり追従となつては、文化の独立はない」⁷⁶と警告を発した。桑原武夫は1959年に雑誌『思想の科学』に「研究者と実践者」という随筆を発表し、「外国の知名の学者がくると、ご高話拝聴という形になるのはもうやめにしたという気はする」⁷⁷と書いた。柳や桑原の言葉には、明治の文明開化からアメリカによる占領期を経て、日本に根強く存在し続ける欧米の「ご高話拝聴」という圧力の大きさが感じられる。しかし、寿岳は、この圧力に屈することなく、寿岳自身の眼でブレイクを捉えようとした。

4 寿岳文章のブレイク理解

寿岳のブレイク理解は、漱石の言う「自己本位」型の研究姿勢の系譜の上にある。その特徴は、大乘仏教と生活という二つの言葉で説明できる。

寿岳はブレイクについて次のように語る。

幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じるのはまことに当然である。[中略]彼は大乘仏教的であるがゆゑに、極めて肯定的であり、積極的であり、生命的である。法則によつてのみ律せられる小乗的な世界は完全に揚棄せられて、大胆な衝動をそのままに肯定し美化し莊嚴

して一切智の殿堂に到らしめる教へを、十九世紀初頭の西欧に於いて、ブレイクほど力強く熱心に説いた人は数多くあるまい。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁷⁸

寿岳は「大乘仏教の經典に親しんできた」こととブレイク理解とを結びつけ、大乘仏教とブレイクの思想との類似を指摘する。寿岳はブレイクの特徴を「肯定的」、「積極的」、「生命的」、「大胆な衝動」という言葉で表現した。既に見たように、ブレイクは『天国と地獄の結婚』に「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉を記しており、あらゆる生命を尊重するブレイクの思想を、寿岳は大乘仏教に引き寄せて理解した。さらに、「法則によつてのみ律せられる小乗的な世界」をブレイクは止揚した、と寿岳は言う。この言葉の源も、ブレイクの『天国と地獄の結婚』にたどることができる。

イエスが十戒をどのように認識したかを聞くがよい。彼は安息日を無視し、安息日の神を蔑ろにし、彼の為に殺された人々を殺したではないか。姦淫をして捕まった女に律法を適用しなかったではないか。彼を支えるために他人の労働を盗んだではないか。ピラトの前で弁明しなかったことで偽証をしたではないか。弟子たちのために祈りをする時、また、宿を貸すことを拒否した人々の家を出る際には、足の塵を払い落とすように弟子たちに命じる時、彼は隣人の物を欲したではないか。私は言っておく。これらの十戒を破ることなくいかなる徳もあり得ない。イエスのすべてが徳だった。そして律法によってではなく、衝動によって行動したのだ。(ブレイク『天国と地獄の結婚』)⁷⁹

十戒とは、旧約聖書において、神がモーセに与えたとされる十項目の掟である。旧約聖書の神は、モーセを通して、イスラエルの民が十戒を守ることを求めた。十戒は、安息日に仕事をしてはならない、人を殺してはならない、姦淫をしてはならない、盗みをしてはならない、偽証をしてはならない、隣人のものを欲しがってはならない、などの禁止の命令から構成される。新約聖書で、イエスは、これらの禁止の命令を破った人物として語られる。生命や生活が掟によって脅かされるとき、生命や生活を守るために、イエスは掟を破ることを選んだ。イエスにとって、宗教や社会の掟は、人々の暮らしの保護を目的として設定されているのであり、その逆ではない。掟と暮らしとが衝突する場合は、掟を変えていかなければならない。そのような意味で、イエスは、当時のユダヤ教社会に反抗する反逆者だった。

78 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、31頁。

79 '[...] now hear how he has given his sanction to the law of ten commandments: did he not mock at the sabbath, and so mock the sabbaths God? murder those who were murdered because of him? turn away the law from the woman taken in adultery? steal the labor of others to support him? bear false witness when he omitted making a defence before Pilate? covet when he pray'd for his disciples, and when he bid them shake off the dust of their feet against such as refused to lodge them? I tell you, no virtue can exist without breaking these ten commandments: Jesus was all virtue, and acted from impulse: not from rules' (Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E43).

80 田川建三『イエスという男
——逆説的反抗者の生と死』
(三一書房、1980)、29頁。

81 寿岳「ブレイク研究への序
説」、『ブレイクとホキットマン』1
巻1号、32頁。

言葉は、このように状況に向かって発せられるときには、明らかに、一つの行動なのである。そしてイエスの言葉を行動の一コマとしてとらえる者は、さらに、イエスの活動全体をも、その歴史的状況に立ち向かったものとして理解することができる。そうしてはじめて、イエスは何故殺されたかが理解できる。イエスは、権力によって逮捕され、殺された反逆者だったのだ。権力の側にいわせれば、どうしてもつかまえて殺しておかねばならないような男だったのだ。(田川建三『イエスという男』)⁸⁰

ブレイクの『天国と地獄の結婚』は、反逆者としてのイエスに注目する。『天国と地獄の結婚』には悪魔が登場し、律法の遵守を唱える天使と対話を行う。この対話で、悪魔は天使に対して、反逆者としてのイエス像を説き、イエスは「徳」を体現しており、「衝動」から行動した、と説明する。なぜ、悪魔がイエスについて語るのか。天使は律法に基づく宗教と社会のあり方に疑問を持っておらず、したがって、体制側にとって「善」である。これに対して、体制に異議を唱え、反抗する者は「悪」であり、そのようなものとしてイエスは十字架に掛けられた。だから、『天国と地獄の結婚』では、悪魔がイエスの代弁をする。現行の秩序のあり方に満足せず、そこに問題を見出す者が「悪」とみなされるのであれば、新しい秩序の可能性は、常に「悪」によってもたらされる、と言えるのかもしれない。

『天国と地獄の結婚』は1790年頃に制作されたとされる。1790年代はフランス革命と恐怖政治の時代であり、『天国と地獄の結婚』に見られる「善」と「悪」とを相対化する視点は、このような環境と関わりがあると考えられる。体制側から見て「悪」とされる革命勢力は、アメリカに独立を、フランスに共和政をもたらし、血筋によって人生が決定される身分制社会から、当事者が話し合いで物事を決定する市民社会へと社会のあり方を変革した。その一方で、同じ革命勢力が権力欲と支配欲にとらわれたとき、見解を異にする勢力を「悪」とみなして肅清する恐怖政治が出現した。「生きとし生けるものはすべて神聖である」という原則を実践するためには、価値観の異なる存在と共生する方法を考えておかねばならない。万物を肯定するブレイクの思想について、寿岳はさらに考察を進める。

しかしブレイクに於ける生命の肯定は、他を犠牲にしても自己の慾望を充足しようとする利己的なものでは決してない。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁸¹

ブレイクは、1790年代には、「悪」に積極的な価値を置き、革命を支持する作品群を次々に制作した。しかし、1800年代になると、「利己心」(Selfhood)の制御を作品の中心に据えるようになる。ブレイクの思想的変遷を、寿岳は次のようにまとめた。

この世の有情非情は、みなブレイクの心の眼に人間の神聖な形となつて現れる。山川草木が悉く人間に外ならないのである。かくしてブレイクの思想は「罪の赦し」と「我の寂滅」とを基調とする大悲の仏心に昇華して已む。(寿岳「ブレイク研究への序説」)⁸²

ここで寿岳が用いた「罪の赦し」という言葉は、ブレイクが『両性のために——天国の門』に書き込んだ「それぞれの悪徳の互いのゆるし／そのようなものが天国の門である」⁸³という言葉に、また「我の寂滅」はブレイクの『ミルトン』に見られる「利己心の滅却」⁸⁴という言葉に由来する。どちらも、ブレイクにおいて、価値観の相違が争いの原因となることを回避し、相互寛容を実現するための重要な鍵概念である。寿岳はこれらを的確に把握した上で、ブレイクの思想を「大非の仏心」という仏教の用語に接続した。

関西学院の卒業論文に見られたように、寿岳は仏教に引き寄せてブレイクを理解した。たとえば、寿岳は「BLAKEと華嚴」という短い記事の中で、ブレイクという言葉と仏教の経典の言葉とを次のように並べてみせる。

To see a World in a grain of sand, / And a Heaven in the wild flower, / Hold Infinity in the palm of your hand, / And Eternity in an hour, (Auguries of Innocence.)

(一粒の砂に世界を見、一茎の華に天国を観る。／汝がたなごゝろに無限を握り／一念のうちに永劫を知れ。)

『この蓮華蔵(れんげざう)、世界海の内に於て、一々の微塵の中に、一切の法界を見る』(盧舎那仏品)

『無量の仏刹の思議し難きを、皆悉く能く一掌の中に置く』(菩薩十住品)(寿岳文章「BLAKEと華嚴」)⁸⁵

寿岳が実践したのは、フランス派比較文学の実証研究ではなく、アメリカ派比較文学の対比研究である、と言えるのかもしれない。ただし、寿岳がフランス派比較文学やアメリカ派比較文学という用語や方法を知っていたかどうかはわからない。そもそも、寿岳が比較文学で言うところの対比研究を行った、と言っても、それで何かが明らかになるわけではない。ブレイクを大乘仏教に引き寄せて理

82 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、32頁。

83 'Mutual Forgiveness of each Vice / Such are the Gates of Paradise' (Blake, *For the Sexes: The Gates of Paradise*, E259).

84 'I come in Self-annihilation & the grandeur of Inspiration' (Blake, *Milton*, E142).

85 寿岳文章「BLAKEと華嚴」、『英語青年』54巻9号(1926年2月)、2頁。

86 寿岳文章「ブレイク神話の輪廓」、『英語青年』57巻10号(1927年8月)、338頁。

87 寿岳文章「ブレイク神話の輪廓」、『英語青年』57巻11号(1927年9月)、375頁。

88 'Both are spiritual, and both democratic; both by their works recall, even to so untaught and tentative a student as I am, the fragments vouchsafed to us of the Pantheistic poetry of the East' (Algernon Charles Swinburne, *William Blake: A Critical Essay* (London: John Camden Hotten, 1868), 301).

89 'Blake is even in accord with Eastern mysticism: Urthona is Dharma; Urizen, Karma; while both Tharmas and Luvah are included in Maya' (S. Foster Damon, *William Blake: His Philosophy and Symbols* (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1924), 145).

90 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1巻1号、35頁。

91 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』1巻9号(1931年9月)、431頁。

解した寿岳は「ブレイク神話の輪廓」という論考で、それぞれが個別の特徴を持つ万物が、全体として見れば一つの人格を形成する、というブレイク神話の設定に注目し、これを「九会曼荼羅の毘盧遮那仏のやう」⁸⁶と形容した。また、寿岳はブレイクの『エルサレム』の末尾を謡曲になぞらえ、ブレイクのキリスト教観を「一神論的汎神論」と説明した⁸⁷。

ブレイクと「東洋の汎神論的な詩」⁸⁸との類似を指摘したのはA. C. スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909)であり、「東洋の神秘主義思想と一致する」⁸⁹と言ったのはフォスター・デイモンである。ブレイクと仏教とを結びつけること自体は、特に珍しいことでもなく、また、これらの先行研究の影響を受けて、寿岳が仏教の枠組でブレイクを理解した、というわけでもあるまい。寿岳の生い立ちを振り返れば、「幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じる」という寿岳の言葉は、額面通りに受け取ってよいだろう。寿岳のブレイク理解から見えてくることは、アメリカ独立戦争とフランス革命という激動の時代にあつて、理想的な社会の仕組みを考えてブレイクがたどりついた利己心の滅却と相互寛容という鍵概念が、煩惱からの解脱を掲げた仏教の教義と重なることが多い、という事実である。この事実は、19世紀から20世紀初頭にかけて、帝国主義と植民地主義が世界を席卷していた時代に、ブレイク理解が遅れた理由の説明になるだろう。また、そのような時代に、仏教の専門家でもある寿岳がブレイクに傾倒したことは、利己心と競争原理がもたらす弊害の解毒剤がどこにあるかを示している。

寿岳のブレイク理解を考える上で、第二の手掛かりとなるものは生活である。寿岳は「ワイマールの枢密顧問官であつたゲーテ」と対比して、ブレイクの慎ましやかな生活を強調し、「生活と芸術とを結びつけて考へるとき、私はゲーテを尻眼にかけて通るが、ブレイクの前では無条件に頭がさがる」⁹⁰と記した。ここには、煩惱に対峙する僧侶、あるいは求道者としての寿岳の姿が見える。寿岳は、さらに、その延長線上で、ブレイクを読むという行為そのものを自らの生活の一部に位置付けた。既に見たように、ブレイクは「生きとし生けるものはすべて神聖である」と宣言し、利己心がもたらす害悪を訴え、相互寛容の重要性を説いた。ブレイクの言葉を1931年の日本で読むことは、何を意味したのだろうか。

寿岳は『ブレイクとホキットマン』の1巻9号に次のように書いた。

宇宙の生命に比ぶれば無にも等しい数千年の間に、民族は民族と争ひ、階級は階級と闘つて、線香花火のやうに消え去つてゆく。これは耐へ難いほど淋しい事実ではないか。(寿岳「雑記」)⁹¹

『ブレイクとホキットマン』1巻9号の奥付には、「九月十日印刷／九月十五日発行」とある。この3日後の9月18日に満州事変の発端となる柳条湖事件が起きた。奥付の日付を文字通りに受け取るならば、寿岳の言葉は満州事変を受けて書かれたものではない。しかし、ブレイクを読むことと1931年の日本を生きることが、寿岳の中で結び付いていたことがうかがえる。翌年の1932年の2月に発行された2巻2号の編集後記には、次のような言葉がある。

私共が本誌を刊行するのは、幾度か言を重ねてきた通り、決して道楽や趣味から出発してゐるのではない。さう言う雑誌ならばほかにいくらあろう。良心を見失はうとする現代に、良心のありかを示し、「静かなる小さき声」を聴けよとて本誌は生れた。その所志をあくまでも貫かずにはおかぬ私共の心である。(寿岳「雑記」)⁹²

寿岳は、当時の日本が置かれた状況を指して、「良心を見失はうとする現代」と言った。そのような時代にあつて、『ブレイクとホキットマン』という雑誌は「良心のありか」を示すために生まれた、と寿岳は言う。ブレイクを読むことは、良心が見失われつつある時代において、どのように振舞うべきかを示す指針となる、と寿岳は考えたようだ。ここで寿岳が用いた「静かなる小さき声」という表現は、旧約聖書「列王記上」に由来し、そこでは、逆境にある預言者エリヤの前に、神がかすかな細い声として姿を現す⁹³。寿岳を預言者エリヤに、ブレイクを「静かなる小さき声」に重ね合わせるならば、雑誌『ブレイクとホキットマン』はブレイクとホイトマンを紹介するだけでなく、社会に対する警世の書という位置付けを持たされていたことがわかる。戦争の拡大に向かって進みつつある時代の趨勢について、寿岳はブレイクを引きながら批判する。

今の時代は、あまりにも軽々しく生命の厳存を冒瀆しようとする傾向にあるかの如く私には感じられる。‘生あるものは凡て神聖である’とブレイクは屡屡言ふ。一つの生命が伸び、感じ、苦しんでゐる事実には、最大な神秘がひそんでゐることを、人よもつと痛感せよ。戦争の惨禍を想像するたびに、私の心には亡びゆく生命の呻きが悲しくも響く。(寿岳「雑記」)⁹⁴

翌月の5月には、五・一五事件が発生し、首相の犬養毅が暗殺された。寿岳は編集後記で、絶望に近い怒りを露わにする。

92 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻2号(1932年2月)、95頁。

93 ‘And after the earthquake a fire; but the LORD was not in the fire: and after the fire a still small voice’ (1 Kings, 19. 12). 「地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた」(列王記上19章12節)。

94 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻4号(1932年4月)、191頁。

95 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻5号(1932年5月)、238-239頁。

96 寿岳しづ「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻12号、568頁。

この五月は憂鬱のうちに過ぎた。一日二日置きに降り続く雨。季節はづれに強い風。それにもまして吹きすさぶテロリズムの狂暴なあらし。人類は向上し進化すると言ふ浮誇の愚かしさが痛烈に感じられるのはかかる時に際してである。[中略] 蛮行、私利、強慾、ごまかし、党派根性、宗派争ひ、裏切り、軽薄、淫蕩、殺伐、鈍感、贅沢、暴圧——凡そ考へ得らる限りの邪悪が、一たび過ぎればまた還ることのない人間の歴史を日々に汚してゆく。人類よもういゝ加減に恥を知れと怒鳴りたくなる。きのふは生命の尊貴をのみ一途に思つた私の心が、今日は生命それ自らの存在にすら望みを失はねばならぬとは、何と云ふ悲しい変化であらう。かかる場合に生き得る唯一つの道は、頭をいたづらに高くあぐる事なく、古への托鉢者のやうに、目前数歩の地に眼を伏せ、‘静かなる小さき声’にのみ耳澄まして歩むのほかはあるまい。げにかゝる世にあつては、平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではないのである。(寿岳「雑記」)⁹⁵

「平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではない」と書いた寿岳は、購読者数の減少による経営困難という現実を前にして、雑誌『ブレイクとホキットマン』の休刊を決断する。最終号の2巻12号の編集後記には、寿岳しづの言葉が見える。

ぐんぐんと強く正しく一つのものを突きつめる心なり態度なりを持つ人はほんに少いもの、この雑誌に払はれてゐた五十銭玉はいつたい何に使はれるのか、かう嘆息する私の方がいけないのでせうか。しかし一方では、七十銭になつてもいい、一円に値が上つてもいい、どうぞ止めないやうにとまで言つて、私共の心に暖いたのもしい心を通して下さる方々があります。今の社会の状態で、今の人心の状態で、否、いつの時代にあつても、かうした種類の雑誌として五百の読者は多すぎるのではないかと思います。これは、どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿です。初めから二百人乃至三百人位みが当然だと思つてゐたのです。(寿岳しづ「雑記」)⁹⁶

「どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿」という言葉に、寿岳しづの冷徹な観察眼が見てとれる。寿岳文章は1943年8月13日付の「向日庵消息」で「忙しい家事のひまひまに、岩波書店から頼まれて、しづ子が翻訳を続けてきましたオルコットの『四人の少女』は、一カ月ほど前急に

版不許可となりました」⁹⁷と書いているので、寿岳家の家事は寿岳しづが担当していたのだろう。鶴見俊輔は「あなたは勝つものと思っていましたかと老いたる妻のさびしげに言う」という土岐善麿(1885-1980)の短歌について、軍国主義の時代に同調するところもあった土岐善麿とは異なり、「台所を守って彼の食事の世話をしてきた妻は、食糧だけから見て、別の思いを抱いて黙っていたのだろう」⁹⁸と述べた。寿岳しづもまた、寿岳文章の夢と理想に寄り添いながらも、家事を通して現実をより冷静に見つめていた、と言えるのかもしれない。

97 寿岳文章「向日庵消息第十信」(1943年8月13日)、『寿岳文章書物論集成』、908-909頁。

98 鶴見俊輔「人間と国」、『毎日新聞』(1991年1月1日)、鶴見俊輔『鶴見俊輔集』(筑摩書房、1991-2001)9巻、406頁。

99 寿岳「雑記」、『ブレイクとホキットマン』2巻12号、568頁。

100 寿岳文章「向日庵発願記」、『ブレイクとホキットマン』2巻11号(1932年11月)、裏表紙。

5 思想家としての寿岳文章

『ブレイクとホキットマン』最終号に、寿岳は次のように書いた。

愈々この短い後記を以て暫く読者諸君とお別れする。言ひたい事はこれまでに言つてきたので、私としては今改めて申上げる事もない。寄稿者となり読者となつて最後まで本誌を支持して下さい。下さった諸君に、眼頭の熱くなる思ひして唯感謝の心を贈るばかりである。これからは寒さに向ふ。片隅の日の光をも大切に、恙無き日を送つて下さい。(寿岳「雑記」)⁹⁹

この後、寿岳は「片隅の日の光」を守り続けようとするかのように、向日庵私版本の刊行事業に着手する。ウィリアム・モリスがケルムスコット・プレスを設立して、紙、活字、インク、ページレイアウトなどに工夫を凝らして、理想とする書物を世に送り出したように、寿岳は「向日庵発願記」で宣言する。

著者に諂ふことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装ひを与へ、思想と工藝との二つの世界を密に結び合はせようとするのが私の願ひである。(寿岳文章「向日庵発願記」)¹⁰⁰

刊行された向日庵私版本には、ブレイクの複製本、式場隆三郎が翻訳したテオ・ファン・ゴッホの手紙、ラフカディオ・ハーンが松江と熊本から送った書簡集、さらに寿岳夫妻の和紙研究の成果となる『紙漉村旅日記』などが含まれる。寿岳はあわせて『向日庵消息』というパンフレットを創刊し、1933年6月の第一信から1943年8月の第十信まで発行し続けた。戦争の時代に生きた寿岳の信念は、第

101 寿岳文章「向日庵消息第七信」(1936年2月21日)、『寿岳文章書物論集成』、896頁。

102 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』(研究社出版、1999)、120頁。

七信によく現れている。

とまれ私たちは責任を重んずる生活者であり、思索者であり、また実行者でありたい。歴史の自然法的な方向をのみ重んずる近代の風潮は、歴史の必然にのみ自己を託して、刻々に過ぎてゆく個々の生活の事実をあまりにも無責任に踏みにじってはいすまいか。個人の力ではどうすることもできない歴史の力を明察しながらも、その同じ歴史が教える最も高貴な人間の生活の態度(随順者の数のいかに問わず)に自己を服従させつつ、どんな小さな言葉や行為にも責任を持たせてゆく——今私の望んでいるのはそうした生きかたです。(寿岳文章「向日庵消息第七信」)¹⁰¹

同じ時期に雑誌『工藝』を刊行した柳は、国家総動員法と大政翼賛会に背を向けるようにして、朝鮮、沖縄、アイヌ、台湾の特集号を組み、文化と生活と価値観の多様性を静かに訴え続けた。寿岳もまた、殺戮と破壊に背を向けて、向日庵私版本として美しい書物を制作し続けた。寿岳の活動はそれ自体が「静かなる小さき声」であり、「平凡に正しく思念して生きること」の実践だった。侵略と支配が「歴史の必然」とみなされる時代にあって、寿岳は「個々の生活の事実」を守るために、その時代に生きた者の一人として、社会的責任を果たそうとした。

戦前の英文学者の動向を探った宮崎芳三は『太平洋戦争と英文学者』の中で、英文学者は「敵性文学」を研究する以上、危険視されてもおかしくはなかったが、そのようなことは起きなかった、と指摘する。転向という現象も当時の英文学者には見られなかった。なぜなら、転向とは思想を持つ人に起きる現象であって、「戦争中の大多数の英語教師、英文学者の心は思想以前の状態だった」¹⁰²からである。宮崎によると、日本の英文学者は、少数の例外を除いて、考えるということをしなかった。彼らは欧米の英文学者の研究を手本として、勤勉に実直に英語と英文学の勉強を重ねた。結果として、多くの英文学者は信念を持たず、したがって、危険思想の持ち主と見られることもなく、特別高等警察の監視対象になることもなく、転向という現象も起きなかった。欧米の最先端の研究を輸入することに情熱を燃やし、欧米の研究者に認められるための競争に終始し、自他の順位付けに汲々としている有象無象の英文学者とは、一言で言うならば、主体性もなければ考える能力もない優等生の群れである。彼らは、なぜ、日本で英文学を研究するのか、英文学を研究することの意義は何か、英文学研究からどのような叡智を引き出して、どのように社会に還元すべきなのか、という社会的責任を意

識することのないまま、勉強に明け暮れ、沈黙した。沈黙したと言えば、聞こえが良すぎるかもしれない。彼らには語るべき思想がなかったのである¹⁰³。

だいたい、わけもなく“外国”をあこがれるのは幼稚である。本場に行けばなんでもわかるようになると考えるのは単純である。同じ文学作品なら、国文学として見るか、外国文学として読むかで違いである——そんなこともわきまえず、留学などするのは軽薄である。留学をありがたがっていると、そういうことがわからなくなる。(外山『日本の英語、英文学』)¹⁰⁴

このような、いわば受験生の精神状態から卒業できない英文学者の集合を背景にしたとき、寿岳の立ち位置は鮮明になる。戦後に寿岳は次のように記した。

ただ、ひとことつけくわえておきたいのは、半世紀以上にあたる私と文学(とりわけ英文学)とのとりくみをふりかえってみたとき、それを酵母にして自分自身の生活体験を発酵させ、日々の行動に造詣しようとの願いをつらぬいて現在にいたり、これからもその姿勢は続くであろうとの見通しである。文学は、私にとって、思考や研究とだけ結びつくものではない。人生のほかのあらゆる事象と同様、行(ぎょう)じてこそ意義をもつ。(寿岳文章「ダンテとブレイク」)¹⁰⁵

人文学は、高尚であることに、その存在意義があるのではない。世俗から遊離した無用の用であることに、意味があるのでもない。もちろん、それは知的遊戯でもない。人文学は、暮らしやすい社会のあり方を考えるための思考実験の場であり、価値観を鍛え直す場である。英文学者、書誌学者、和紙の研究者としての寿岳の仕事は、日本語と日本文化という社会環境の中で外国文学を研究することはどのような意味を持つのか、という問題意識に裏打ちされていた。寿岳は大東亜共栄圏という幻想に幻惑されることもなく、欧米の研究を鵜呑みにして思考を停止することもなかった。文学は「行じてこそ意義をもつ」という言葉のとおり、寿岳はブレイク研究の成果を実践し、時代に対する応答として「静かなる小さき声」を発信し続けた。戦前と戦中を通して、ささやかではあったにしても、寿岳はブレイク研究に社会的意味を与えようとした。日本の英文学者としては稀有な、軸の定まった思想家の姿を、寿岳文章の中に見ることができる。

103 「そしてここで私が思想と言っているものは、なにもとくべつな大げさなものではない。自分のしていることを意味づける一定の見方をもつことである」(宮崎『太平洋戦争と英文学者』、120-121頁)。「思想はまず、信念と態度との複合として理解される」(鶴見俊輔『共同研究・転向』上巻(平凡社、1959)、『鶴見俊輔集』4巻、11頁)。鶴見は宮崎の著書について、「戦中もそうだし、敗戦後、占領下にも、英語をまなび、教えることは、英文学者、英語教師にとって自分自身の態度を明らかにすることを必要とされるきわめて挑戦的な仕事だった。その側面が、ようやくこの著書をとおしてあきらかになった」と述べている(鶴見俊輔『教育再定義への試み』(岩波書店、1999)、192頁)。

104 外山『日本の英語、英文学』、26頁。

105 寿岳文章「ダンテとブレイク」、『英語青年』119巻6号(1973年9月)、寿岳文章『わが日わが歩み——文学を中軸として』(荒竹出版、1977)、72頁。